

図解 腰痛学級 第5版

川上俊文 ● 著

〔評者〕菊地臣一(福島県医大理事長兼学長・整形外科)

疾患概念の劇的な変化という観点からすれば、「腰痛」は代表的な一つに挙げられるであろう。と同時に、医療の評価基準も、近年、革命的といえるほど変わってしまった。

捉え方の変化の代表的な点として、まず、急性腰痛の単なる遷延化が慢性腰痛ではないということが明らかになった。そして、関与因子として心理・社会的因子が、われわれが従来認識していた以上に早期から深く関与していることもわかってきた。次に、非特異的腰痛はできるだけ医療の対象化にしないことの重要性への認識、すなわち自己管理の推奨である。最後に、患者自身が治療の選択、実施の遂行に積極的に参加することが治療成績や満足度を考えるうえでも大切である点がわかってきたことである。

一方、治療成績評価基準の変化に目を転ずれば、まず、「医師側からのみの評価」から「患者の視点の導入」の転換が挙げられる。つまり、患者のQOLや満足度の重視である。そして、患者の価値観の尊重である。これにより、同じ病態でも個人により治療の選択肢は異なってくる。治療方針の選択を医師と患者が分担することにより「共闘」という信頼関係が成立する。次に、医療提供側と患者との信頼関係の存在が治療成績や

満足度に好影響を与えるという事実が立証された。EBM(evidence-based medicine)が明らかにしたものは、皮肉にも、NBM(narrative-based medicine)の重要性なのである。最後に、良いか悪いかは別にして、「信頼の医療」から「契約の医療」への移行がある。ここでは、医療提供側から患者への教育・指導、あるいは啓発活動は欠かせない。残念ながら、最新の文献では、医療提供側が提供している説明文書のほとんどは、一般の人は理解が困難であるという報告がされている。

このような時代背景から本書をひといてみる。

まず、本書は1986年に第1版が発刊されている。以来、版を重ね、本書は第5版である。その間、四半世紀、本書は腰痛の研究の進展とともに歩んできたといえる。最新版である本書は、質、量ともに充実した内容と構成を有している。この第5版の特徴は、最先端の研究成果と自分の経験を統合した著者の集大成の著書であるといえる。すなわち、EBMというscienceと著者のNBMというartの統合である。

第二に、最近重視されつつあるself-medicationの概念が盛り込まれていることが特徴的である。つまり、「受け身の医療」から、患者も参加する「攻めの医療」の



導入である。

第三に、わが国の医療体制や医療保険の実態を踏まえて、わが国における腰痛のプライマリケアの在り方を提唱している点がある。

本書は、専門書としても十分通用する。豊富で明快な図は、Macnabの名著『腰痛』のそれをほうふつとさせる。平易な文章は、腰痛に悩んでいる一般の人でも十分理解可能である。この内容、量でこの値段は安い。一般の人のみならず医療従事者にもお薦めである。

B5 頁328 2011年
定価3,990円(本体3,800円+税5%)
[ISBN978-4-260-01237-9]
医学書院 刊